

春期福音特別集会（4）

棄石——ルカ伝 20・1～19

1973年3月23日（南房保田）

小池辰雄

【見出し】

入信の最初の記念写真 葡萄園の農夫ども 棄石 隅の首石 第二の天性 神さまの如く慈悲
なれ 祈り

【ルカ20】

1 或日イエス宮にて民を教え、福音を宣べい給うとき、祭司長・学者らは、長老どもと共に近づき来り、²イエスに語りて言う『なにの権威をもて此等の事をなすか、此の権威を授けし者は誰か、我らに告げよ』³答えて言い給う『われも一言なんじらに問わん、答えよ。⁴ヨハネのバプテスマは天よりか、人よりか』⁵彼ら互に論じて言う『もし「天より」と言わば「なに故かれを信ぜざりし」と言わん。⁶もし「人より」と言わんか、民みなヨハネを預言者と信するによりて、我らを石にて撃たん』⁷遂に何処よりか知らぬ由を答う。⁸イエス言いたもう『われも何の権威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ』⁹かくて次の譬を民に語りいで給う『ある人、葡萄園を造りて農夫どもに貸し、遠く旅立して久しくなりぬ。¹⁰時至りて、葡萄園の所得を納めしめんとて、一人の僕を農夫の許に遣ししに、農夫ども之を打ちたたき、空手にて帰らしめたり。¹¹又ほかの僕を遣ししに、之をも打ちたたき、辱しめ、空手にて帰らしめたり。¹²なお三度めの者を遣ししに、之をも傷つけて逐い出したり。¹³葡萄園の主いふ「われ何を為さんか。我が愛しむ子を遣さん、或は之を敬うなるべし」¹⁴農夫ども之を見て互に論じて言う「これは世嗣なり。いざ殺して其の嗣業を我らの物とせん」¹⁵かくてこれを葡萄園の外に逐い出して殺せり。さらば葡萄園の主かれらに何を為さんか、¹⁶来りてかの農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに与うべし』人々これを聴きて言う『然はあらざれ』¹⁷イエス彼らに目を注めて言い給う『されば「造家者らの棄てる石は、これぞ隅の首石となれる」と録されたるは何ぞや。¹⁸凡そその石の上に倒るる者は砕け、又その石、人の上に倒るれば、その人を微塵にせん』¹⁹此のとき学者・祭司長ら、イエスに手をかけんと思いたれど、民を恐れたり。この譬の已どもを指して言い給えるを悟りしに因る。



●入信の最初の記念写真

今日は1973年3月23日です。私はこの3月23日という日を妙に覚えている。というのは、今からちょうど50年、半世紀前の1923年3月23日に、実は私は独りで記念写真を撮った。小石川同心町のイグチという写真館でしたけれども。私の兄が持っていた形見の聖書を携えて、19歳の私でしたけれども、写真を撮った。それはその前の年(1921年)の9月22日に兄が北京でもって客死いたしました。その兄の死を通して私は救われたんです。内村鑑三先生の集会に1922年の晩秋あたりから出かけて行って、そして1923年の3月23日にそういう入信の最初の記念の写真を撮った。今でも、ありありとその姿を覚えているんですが、紅顔の美少年で(笑)。そういう、ちょうど50年前の今日この日なんです。さつき自分でハツと思ひ出して、なんか非常に懐かしい気持ちになったんですが。

●葡萄園の農夫ども

マタイ、マルコ、ヨハネ、そして今日はルカです。これも今朝、私はルカ伝をずっと読んで——読むなんていつたつて、およそ一行ごとに読みはしない——頁を見ると、「ああここにはこれがあるな」とスーッとくるから、楽に頁がめくれるわけです。そして、ルカ伝の20章にきた。「あつこれだ」ということになった。……

ルカ伝20章へ行きます。

1 或日^{あるひ}イエス宮にて民を教え、福音を宣^のべい給うとき、祭司長・学者らは、長老どもと共に近づき^{きた}来り、2 イエスに語りて言う『なにの権威をもて此等の事をなすか、此の権威を授けし者は誰か、我らに告げよ』。3 答えて言い給う『われも一言なんじらに問わん、答えよ。4 ヨハネのバプテスマは天よりか、人よりか』。5 彼ら互に論じて言う『もし「天より」と言わば「なに故かれを信ぜざりし」と言わん。6 もし「人より」と言わんか、民みなヨハネを預言者と信ずるによりて、我らを石にて撃たん』。7 遂に何処^{いずこ}よりか知らぬ由^{よし}を答う。8 イエス言いたもう『われも何の権威をもて此等の事をなすか、汝らに告げじ』

これは実に鮮やかな問答です。もう完全にキリストにお面一本です。剣道の達人ですね、このキリストは。

私はこのルカ伝20章をなぜ今朝、選んだかというのと、またこれもひとつのきつかけが、伏線がある。というののは、昨日夢を見て、夢の中で無教会のやつと喧嘩してしまっただけしからん屁理屈を言うからね。それで私がもう最後に、

「神は知り給う！」

と叫んだ。それでその夢は破れたんですけれども。そういう夢を見たので、今朝はもの凄く戦闘的なんだ(笑)。

9 かくて次の譬^{たとえ}を民に語りいで給う『ある人、葡萄園を造りて農夫どもに貸し、



遠く旅立して久しくなりぬ。

「ある人」というのは、この場合もちろん神さまのことを譬えているわけです。「葡萄園」というのは、イスラエルの民はよく「葡萄園」に譬えられる。イザヤ書第5章がそうです。

「せつかくの葡萄園が野葡萄になつてしまった。とんでもない不信の民だ」と言つて、神さまが嘆いているところがある。

10時至りて、葡萄園の所得を納めしめんとて、一人の僕を農夫の許に遣ししに、農夫ども之を打ちたたき、空手にて帰らしめたり。11又ほかの僕を遣ししに、之をも打ちたたき、辱しめ、空手にて帰らしめたり。12なお二度めの者を遣ししに、之をも傷つけて逐い出したり。13葡萄園の主いふ「われ何を為さんか。我が愛しむ子を遣さん、或は之を敬うなるべし」14農夫ども之を見て互に論じて言う「これは世嗣なり。いざ殺して其の嗣業を我らの物とせん」15かくてこれを葡萄園の外に逐い出して殺せり。さらば葡萄園の主かれらに何を為さんか、16来りてかの農夫どもを亡し、葡萄園を他の者どもに与うべし』人々これを聴きて言う『然はあらざれ』17イエス彼らに目を注めて言い給う『されば「造家者らの棄てる石は、これぞ隅の首石となれる」と録されたるは何ぞや。18凡そその石の上に倒るる者は碎け、又その石、人の上に倒るれば、その人を微塵にせん』

烈しい譬話です。これはマタイ伝の21章にも同じような記事がありますけれども。この葡萄園の持ち主、即ち神さまは——「農夫ども」というのは、学者やパリサイ人また教法師、祭司、要するにそういった宗教的な特権階級の連中がこの「農夫ども」です——これに預けてある。即ちユダヤの宗教が全くそれらの手の中にあるという、当時のユダヤ教の姿がそこに現れているわけです。そして、

「他の僕どもを遣わす」

というのには、預言たち、それからキリストのあとでは使徒たち、これが「僕ども」です。そうしたところが、預言者はみな迫害される。そのことが出ている。預言者の最後、特別な預言者、神の子、キリスト、即ち「わが愛しむ子」ですから、これならば敬うかと思つたら、どっこい一番これはとつ捕まえて、とうとう殺してしまつたという。キリストは自分の十字架の死のことを既にここで預言しておられるわけです。この「農夫ども」というのは、自分たち、祭司や学者どもを指していることを彼らはもう気がついているものだから、何とかしてこのキリストを手がけようとする。

19此のとき学者祭司長ら、イエスに手をかけんと思いたれど、民を恐れたり。

と、19節に書いてあるでしょ。そのようにキリストは結局、当時のいわゆる正統派のユダヤ教の連中に捕まつて、策謀によって捕まえられて、そしてローマの兵隊もこれに加わつて、最後には民衆まで加わつてしまう。そして、キリストは十字架にかけられる。そのことを



自分でもう既に預言した。

ついでにマタイ伝21章の方をちよつと開いて下さい。マタイ伝の方がもう少し詳しく書いてある。21章33節から、

「³³また一つの譬を聴け、ある家主、

父なる神、

葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を掘り、櫓を建て、農夫ども

即ち祭司や教法師、

に貸して遠く旅立せり。³⁴果期ちかづきたれば、その果を受取らんとて僕ら

即ち預言者たち、

を農夫どもの許に遣ししに、³⁵農夫どもその僕らを執えて、一人を打ちたたき、

一人をころし、一人を石にて撃てり。³⁶復ほかの僕らを前よりも多く遣ししに、

そういつたいろいろの神の僕たちですね、

之をも同じように遇えり。³⁷「わが子は敬うならん」と言いて、遂にその子

即ちキリスト、

を遣ししに、³⁸農夫ども此の子を見て互に言う「これは世嗣なり、いざ殺して、

その嗣業を取らん」³⁹かくて之をとらえ、葡萄園の外に逐い出して

「葡萄園の外に」ということは、キリストがエルサレムの城外でもつてゴルゴタで十字架にかけられることの、もうちゃんとキリストは自分の先を知ってらっしやるから。

殺せり。⁴⁰さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を為さんか』⁴¹か

れら言う『その悪人どもを飽くまで滅し、

それはどこまでも、いわゆる正統派であるところのパリサイ的な宗教を撲滅させてしまうという。

果期におよびて果を納むる他の農夫ども

即ちこの場合はもちろん使徒たち、

に葡萄園を貸し与うべし』

そして、別な者にということは異邦人ということになる。

⁴²イエス言いたもう『聖書に、「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とあるを汝

ら未だ読まぬか。

これは詩篇88篇の聖句ですね。

⁴³この故に汝らに告ぐ、汝らは神の国をとられ、

お前たちユダヤ人は神の国をとられて、「自分たちは選民だ」と思っているが、とんでもない間違いだ。

其の果を結ぶ国人は、



異邦人の中の、聖霊を受けて本当に福音を受けとる者たちが「其の果を結ぶ国人」です。之を与えらるべし。⁴⁴この石の上に倒るる者

即ちキリストに躓く者、

はくだけ、又この石、人のうえに倒るれば、

即ちキリストの審判にあえば、

其の人を微塵とせん』

微塵に亡ぼされてしまう」と。

⁴⁵祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給えるを悟り、
⁴⁶イエスを執えんと思えど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに囚る。』
（マタイ 21・33～46）

ということが書いてあるわけです。

● 棄石

またルカ伝の方に戻ります。

「棄てたる石」「棄石」。私は今まで、「天鐘」とか「天晨」という号をよく使いました。しかし、これからは——それを止めるのではないけれども——「棄石」という号を時々使うつもりです。私は無教会や教会に棄てられている男だから、この「棄石」ですよ。ところが有り難いことに、この棄てられたる石は、キリストご自身が自らを譬えておられる。そして、それは「隅の首石」となる。本当のどん底で一切のものを担うところの、その基礎になるもの——人には隠れている、世には躓かれています——しかしながら、これが本当の世を支えているもの、担っているもので、担いの体勢である。どん底の姿勢である。そういう意味において、「棄石」という言葉は素晴らしいなと思います。

それで、イエス・キリストが正に十字架に棄てられたひとです。十字架に棄てられたこのキリストが実は一切を贖いと担っている。棄てられたと思つたこの石は、ペテロが別なところで「リビングストーン」「活ける石」と言つた。キリストは、

「この友ががもし黙すならば、御霊の輩がもし黙すならば、石が叫ぶ」

と言つた。その意味において、ユダヤには物凄い岩石がありますから、それに

「神は高き櫓、また我らの巖である。千歳の巖である」

と、讚美歌にもある通り。そのような磐石の石ですね。それが私たちの存在の本質をある意味において表してくれる大事な表現であると思う。

パウロの書簡をひとつ開きましょう。コリント前書 4章 9節、

「我おもう、神は使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後^{しりえ}の者として
見せ給えり。

「後の者」というのは最も下の者、いやしき者、僕。



実に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、御物にせられたるなり。10
我らはキリストのために愚なる者となり、
いいですか、キリストのために愚者となるという。親鸞なら、「大愚」と自ら言った。
汝らはキリストに在りて慧き者となれり。我等は弱く汝らは強し、汝らは尊
く我らは卑し。

卑しくして、弱くして、馬鹿者でと、パウロは自分を一番くずに置いてしまった。

11今の時にいたるまで我らは飢え、渴き、また裸となり、また打たれ、定め
る住家なく、12手づから働きて勞し、

もつたいないはなしです、私たちなんかは。

罵らるるときは祝し、

まあ今日の夢みたいに怒ってはいけないんだ、本当は(笑)。

責めらるるときは忍び、13譏らるるときは勧めをなせり。

山上の垂訓の中にも同じ角度の言葉があったわけです。

我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、万の物の垢のごとくせられたり。」(コ

リント前4・9、13)

これ以上の表現はない。どん底の存在です。キリストの在り方は、本当にいつもどん底
に立っていた。らい病人がいれば、らい病人の所に本当に自分を置く。

私ほらい病院に行つて、お話をしたことがある。そうすると、壇上とらい病人の間に溝
みたいな隔てがあつて——私はそんなのは嫌だから——らい病人がみな並んでいる所の真
ん中に入つて、そして手を置いて祈つたり、そこで話した。院長さんが驚いてしまつて、

「そんなことをして話をする人はなかつた」

という。

「いや、大丈夫です。私は病気が移らない。私は御霊がみちみちているから、ここ
らから流れているから、それは心配ない」

と。私はもの凄くそのつもりで——今もそうですけれども——やつたですよ。そうしたら、
その時のらい病人たちの讚美歌が本当に、何といたしますかね、天地に響くようなもの凄い
歓喜をもつて歌ってくれました。

●隅の首石

キリストは本当に——昨日からも申し上げている通り——どん底に立ち給う。私たちも本
当にどんなことがあつても大丈夫ですよ、そこに立つ。人間的な何かではないですよ、も
うそこは、本当にキリストの霊の満ちるところは、もはや無条件にその運命環境を変えて
いく、担つてくる。それが実は、使徒たちには棄てられる。棄てたと思つたが、どっこい
その棄てたものが、棄てた人たちを担つている。それが十字架の道なんです。そして、こ



れが本当の栄光の道なんです。本当の栄光はそのような人たちに来ている。だから、
 「⁸既に人の状さまにて現れ、己ひくを卑ひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで
 順したがい給えり。⁹この故に神は彼を高く上げて、之もろもろに諸般の名にまさる名を賜たま
 いたり。」(ピリピ2・8～9)

と、ピリピ書にある通りだ。イエスは、最深のものは最高のものである。私たちもキリストと共にこの最深の世界に行けば、実は最高の——谷底を歩いていると思つてたら——峰の上を歩いているんだ。

そういうような事態でありまして、本当のどん底に立っている者は、実は中心なんだ。これは地球の引力の最も中心みたいなもので、一切のものを引きつけている。そのような驚くべき実存が、我々キリストにあつては有る。どんな老いたる者も若き者も、男も女も、クリスチャンというならば、そのような磁極の中心みたいな、一切のものを担っているところの——アトラスという地球を担ったギリシヤの神話があるけれども——アトラスのごとく私たちは本当に担える。どんなに細腕で弱そうであつても、どっこい、そこにこもるところのキリストの霊の力は原始力的なものです。原始力とは始めという言葉です。原始、始め、ウルクラフト(Urkraft)の原始力的なものがこの棄石の中にある。棄石が爆発すれば、えらいことになる。だから、

「これに倒れる者は砕かれる」

とある。しかしながら、これに依り頼む者は本当にこれに担われる。実は、石は烈々たる炎を持つている、石の中に。決して冷たい石ではない。烈々たる炎を持った溶岩のごとき石ですから。パウロのコリント前書4章のこのどん底の言葉はどうですか。本当に彼はそのような苦難を通つて、しかも牢屋につながれても、

「喜べ、喜べ」

と歡喜の書簡を書いている……〔異言〕……。キリストのこのエネルギー、この生命力、この愛の力、

「アモール オムニア ヴィンキット」「愛は一切に勝つ」

というが、「勝つ」というのは相手を全部「救いあげる」ことです。この御霊のキリストの全存在から来るところのこの愛の力にかなうものは、世界、宇宙いづくにもない。だから、仏教の悟りの世界とはそこが違う。もちろん、お釈迦さんも慈悲でありますけれども、しかし、キリストのこの生命力はもう桁がちがう最高のものですから。この宇宙的なキリストは、私たちを本当にどん底に立って担い、十字架されて墓を蹴破つて復活し、生命力をもつて立ち上がってきて、

「この生命を受けよ。もはや神の国はこの生命をもつところにある」

と。私たちは死んでも死なない。傷つけられても決してそれでへこたれないんです。私たちは驚くべき力をもっている。これが即ち棄てられたところの「隅の首石」であつて、



私たちは棄石であるということが本当はもの凄いことであることに気がついてこの棄石となること、このキリストと共に「隅の首石」となっていくこと。もういいですよ、どうでも我々の福音は、もうその他の何ものでもない。

どうぞ、皆さん、大石蔵之助に四十七士があつたが、しかし、ここは四十七人もいない。けれども、あなた方一人ひとり、本当に一人が本当にこの日本を背負っている。宗教においては、「一」ということがもの凄い力である。どうぞ、一人ひとりが本当に、もう

「人がどうである、こうである」と、そんなことではないんです。我一人が、

「全世界を得るとも、この生命を失わば何かあらん」

という、キリストの生命を失ったら、私たちはどうなるんですか。イエス・キリストの生命があればもう他はいいよ。艱難に遭えばあうほど、いよいよ爆発力をもつような人になつて下さい。この世の失敗、挫折、艱難、何かあらんと。これは主イエス・キリストが愛し給うがゆえにこれをいよいよ鍛えて下さる。どうぞ、そういうことで、行きましょう。

●第二の天性

ペテロ前書2章4節、

「⁴主は人に棄てられ給えど、神に選ばれたる貴き活ける石なり。

リビングストーンであると。

⁵なんじら彼にきたり、活ける石のごとく建てられて霊の家となれ。

私たちは活ける霊の家、霊の宮、聖霊の宿る所。我々は活ける神殿であります。

これ潔き祭司となり、イエス・キリストに由りて神に喜ばるる霊の犠牲を献

げん為なり。

私たち自身が霊の献げものです。神さまに対する霊の献げもの、我々自身が。即ち我々の生涯そのものが、神の栄光を現すことがそういうことです。

⁶聖書に『視よ、選ばれたる貴き隅の首石を我シオンに置く。之に依頼む者

は辱しめられじ』とあるなり。

これはイザヤ書28章の言葉。またイザヤ書9章にもある、「躓きの石」という言葉が。

⁷されば信する汝らには尊きなれど、信せぬ者には『造家者らの棄てたる石は、

隅の首石となれる』にて、

これは詩篇88篇22節。

⁸『つまずく石、礙ぐる岩』となるなり。

これはイザヤ書8章14節。

彼らは服わぬに因りて御言に躓く。これは斯く定められたるなり。」（ペテロ

前2・4～8）



そのように、ペテロもこのペテロ前書でもって語っている。

試みを経たる岩は、真理に背く者には躓きの岩。キリストはその躓きの岩である。私たちは、しかし、キリストというこの棄石と同じ実質にされていく。そして、キリストと同じく、それぞれの環境において、場において、隅の首石とされていく。それだけの自信を、本当の自信を持って進んで下さい。

そこで、そのようなキリストが棄てられたということと反対に、さつき言った愛の力、救いの力、これがどのような愛であるかということ、あの山上の垂訓にある通りです。そこを開きます。ルカ伝のあそこは非常に端的に書いてあるところで、私も好きところです。

「³⁶ 汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。」（ルカ 6・36）
 ということは、聖書の福音書の御言の中の最高の言葉ですからね。

「²⁷ われ更に汝ら聴くものに告ぐ、なんじらの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、

²⁸ 汝らを誣う者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ。」（ルカ 6・27～28）

云々と書いてありますね。ひとつびとつ、普通の道徳の世界ではちよつと考えられないような、この言葉。その焦点が一つ結ぶと、ズーツと楽に読めるんです。

「仇を愛するとはどういうことでしょうか？」

なんて考えたって、これは出てこない。味方であろうと、敵であろうと、みんな、さつきから言っている、救いあげてしまうんです。相手を担いでしまう。

私はいつかもしましたね。日露戦争の絵でもって、日本の兵隊が向こうの傷ついたロシアの兵隊を担いで野戦病院へ連れて行く姿。これを小学校4年のとき私は見たが、これは忘れられない。即ち、敵を本当に担いで——敵を刺し殺すのではない——傷ついた者を担いで行く。これが本当の武士道なんだ。今のは、そうではなくて、傷ついたらなおさら刺して殺すようなことをするだろうけれども、武士道精神はそんなものではない。そして、相手を救ってやる、担いでやる。

「何と言われようとお気の毒でございます。ああ、あの人たちは可哀相なものだ」

と。そういうことで、むしろサタンに囚われているから、サタンから奪い返してやらなければならぬわけだ。その力は、相手を変質変貌させるところのキリストの愛の他にない。天来の愛。本当にそれを救いあげようとするのが愛なんです。助けあげようとするのが愛なんです。だから、キリストは十字架上で、

「**彼らは為すことを知らず、彼らを赦してやって下さい**」

と。キリストのあの言葉は、決してキリストはやせ我慢で言ったのではない。本当に身を棄てて、棄石となって、私たちを救って下さった。これ以上のものがあるかという。いわゆる「アガペー」だとか、「エロース」だとか、「フィロース」だとか、ただ分析してものも言っているんじゃないですよ。そのような天来の愛が私たちを、全体を貫いて進んで行く。

ですから、敵も味方もありはしない。天下無敵というのはそういうことなんです。天下無



敵ということは、本当にキリストを持つていっていると、これが私たちに第二の自然になってくる。第二の自然は、これが本当の天性だ。天からやつてくるこの天性、第二の自然性、第二の天性ということに段々されていく。またそれでなければ、自分が本当に生きていくというあれ「実感、生命力、元氣」がなくなつてくるんです。それはハッキリするですよ。そういうものがこの中に動いてこないというと、やっぱりダメになってくる。それは限りなく私たちは上から与えられていくから、

「まあなんとあの人は不思議だろうな」
と言われる。本当に不思議なんだよ、上からくるから。

● 神さまの如く慈悲なれ

それだから、この山上の垂訓でキリストがいろいろ仰つていいることも、スーッと読めしてしまう。そして、最後は何かというと、

「³⁶ 汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。」（ルカ 6・36）

と。これは最高の要求です。

「神さまの如く慈悲なれ」

と言うんですから、これ以上の要求はない。どんな律法だつて、これ以上の要求はない。ところが、この

「汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ」

に対して、

「はいー」

と言えるんです。なぜ言えるかというところ、イエス・キリストという、父なる慈悲を賜つていいる方^{かた}、これを受けとる。

「私を受けとりなさい。そうしたら、父の慈悲はお前たちの中に入つてくるぞ」

と。キリストを受けとるんだから。十字架のキリストを受けとつて、復活^{よみがえり}のキリストを受けとつて、御霊のキリストを受けとれば、父の慈悲が私たちの中に、身の中に動いてくる。

我々はこの新しき霊血をいただいた。霊の血を、また霊肉をいただいて、もう復活の復活体に質的に段々変わつてきているんです。だから、肉体がすつ飛んだつて大丈夫ですよ。そういうようなことに——これは凶太い信仰だからね——そういうことになってきて、もう霊肉渾然としている。魂はただ裸ではない。

「霊体を着せられている」

と、パウロがコリント前書15章で言っている通りなんだ。まず驚くべき世界であります。福音とはそのようなことである。もう私はたまらんですよ。皆さんとこのように特別集会をして、本当にキリストが凝集して、私たちの中にやつてきた。昨日は、

「キリストの中に自分を棄てる」



と言った。キリストの中に自分を棄てると、今度は本当に棄石になって、世に棄てられて、今度は逆にみんなを担ってしまう。この「棄てる」ということが、昨日の話と今日で一つになってしまった。キリストの中に自分を棄てて、棄石となると、世の救いとなる。そして、敵をも愛し、また一切を「父の慈悲なる如く慈悲」というところにまで来てしまう。もうこれ以上のものはないでしょ、本当に。

これは私たちの日常生活で本当にいよいよまた祈っていくことです。祈りがなかったら、その世界が身につかない。本当にキリストの中に祈り込んでいく。何かお願いするのではない。自分をキリストの中に祈りこんで、

「主さま、あなたの中に私は自分を棄てます。どうぞ、私を本当に棄石として、担いの石として下さい」

と言つて進んで行きましょう。しからば、我々は本当にもうただ聖名を讃え奉るばかり。聖書のいずこを読もうとも、楽にそれがどんどん入ってくるから。そして、もう聖書をあなた方が読んでいるうちに、……「異言」……異言になってしまふ、自然に。主イエス・キリストがそのように我々の中に、もう皆さんの中に本当に聖霊が充満して、

「ああ、なんとこれはやっぱり違う世界だなあ。聖書の解釈だとか、意味だとか、そんなことを言っているのとおよそ違うんだなあ」

ということが、この現実の中に入ったらば、言わざるを得ず、語らざるを得ず、告白せざるを得ずということになる。

● 祈り

感謝です。祈ります。……

〔聖化⁶²³番「いつかはしらねど」〕

主さま、毎日毎日の生活において、祈り深く、あなたの一切の諸々のご愛と、また義のさまざまな御姿。この福音書のあなたを本当に現実として身につけ、本当に人の担い手となり、棄石となり、隅の首石となって、あなたと共におられつつ、どうぞ、十字架の道を馳せおわることが出来ますように、お願いいたします。

あなたの聖国に向かって、偉大なる希望をもつて進んでまいります。この国の可哀相な人たち、迷える者たち、また求める人たちに、懇ろに福音の世界を身をもって示していくことが出来ますように。この静かにして、また深き、また時には爆発するような、自在に大自然のごとくにお用いくださいらんことを願ひ奉る。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちの全存在にあふれるそれと共に、キリスト・イエスの聖名により捧げ奉る。アーメン。

